令和7年（2025年）
11
No.829

The Religion News
宗教新聞
https://www.religion-news.net

発行所 宗教新聞社
〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
ⓒ宗教新聞社 2025
購読料（税込）　1部 500円　半年 3,000円（〒共）　年間 6,000円（〒共）

靖國神社で秋季例大祭

世界平和を祈願、英霊に感謝の誠捧げる

東京都千代田区

参進する大塚海夫宮司および祭員＝10月18日、東京都千代田区の靖國神社

東京都千代田区の靖國神社（大塚海夫宮司）で令和7年秋季例大祭が10月17日の清祓から始まり19日までの3日間にわたり斎行された。

曇り空に時折晴れ間がのぞく中、10月18日午前10時、大太鼓が境内に鳴り響き、宮司・神職が参進。本殿の所定の座に着いた。国歌斉唱に続いて本殿内陣の御扉が開かれ、神饌、初献の神酒が供えられた。靖國神社では、ウイスキー、ビール、タバコなど他の神社では見られない品々を含め、英霊を慰めるために計五十台の神饌が春・秋の例大祭の際に供えられる。

その後、宮司は神前に進み祝詞を奏上し、英霊に感謝の誠を捧げた。二献の神酒を供えた後、勅使・十時和孝（ときかずたか）掌典が御幣物を奉じて参向し、本殿の所定の座に着いた。宮司は御幣物を神前に奉奠。続いて勅使は神前に進み御祭文を奏上し、宮司がこれを内陣に納めた。勅使は玉串を奉って拝礼した。

勅使・随員の下向後、「鎮魂頌」「靖國神社の歌」が奉奏され、三献の神酒を供えた後、宮司が玉串を奉って拝礼。宮司に続き、特別参列者および崇敬者総代が本殿に進み、玉串を奉って拝礼した。午後三時、御幣物・神饌が撤せられた後、宮司が御扉を閉じ、秋季例大祭当日祭は滞りなく修められた。

なお、18日の午後には瑶子女王殿下が参拝された。

秋季例大祭の期間中、境内では各流派家元による献華展や奉納菊花展、能楽堂では各種奉納芸能が行われ、17日から19日にかけて剣詩舞、日本舞踊、古武道、琵琶楽、琉球舞踊、江戸芸かっぽれなど様々な芸能が、多くの参拝者が見守る中、奉納された。

靖國神社の遊就館では、終戦80年にあたり日本画家・小早川秋聲（こばやかわしゅうせい）の作品展が11月21日まで行われている。この展示は、作品を所有する京都霊山護国神社から『多くの方々にご覧いただきたい』との作者の遺志に沿い、同館での展示依頼があり、実現した。代表作『国之楯』の他、計8点が3期にわたり紹介されている。

日本画家・小早川秋聲作品展、左から『国之楯』（昭和19年）、『日本刀』（昭和14年）、『浄魂（突撃）』（昭和14年）、京都霊山護国神社蔵

第1期は『国之楯』、『護国（御旗）』、『護国（御旗）』の裏書』。第2期は『国之楯』、『日本刀』、『浄魂（突撃）』。第3期は『国之楯』、『出陣の朝』、『業火（シンガポール陥落）』、『護国の英霊』が展示される予定である。

小早川秋聲（1885～1974）は鳥取県光徳寺住職の長男として生まれ、幼くして得度するが画家を志し、京都で山本春挙に師事した。北京で東洋美術を学ぶ。1914年に『こだまし た後』で文展初入選。満州事変以降は従軍画家として多くの戦争記録画を描き、代表作『国之楯』で知られる。戦後は画壇に属さず、宗教画を中心に制作した。

また、書家・栗原光峯氏による『安寧』と、二松学舎大学付属高等学校書道部による『仁愛』の揮毫が、10月1日から12月24日まで展示されている。これは、9月21日の国連「国際平和デー」に、和プロジェクトTAISHIにより慰霊と追悼、そして平和を祈念して靖國神社境内で奉納されたものである。

天地

8月に出版された『神と科学―世界は「何」を信じてきたのか』（日経BP）は、天地子が最近読んだ中で興味深い本だった▼著者の二人のフランス人は科学が専門だが、本書執筆の目的を「創造神が存在するかどうかを考えるために必要な要素を提供すること」だと述べている。これまでも宗教と科学について論じた書はあったが、本書は宇宙論から生物学や生命科学、数学をはじめ、哲学や聖書など様々な分野の歴史と研究成果をまとめており、フランスでは25万部のベストセラーになったという▼これらの研究成果をあげた上で、唯物論には合理的な根拠が全くなく、「個人主義とあらゆる道徳的な観念の拒否を、知的に正当化する以上のものではない」と強調している。宗教（信仰）と科学に共通するもの、人間観と世界観を考えさせられる意欲作だ▼歴史的な発見をした科学者の中で信仰を持つ人も少なくない。ニュートンは美しい天体は知性を備えた強力な実力者（神）の意図があって初めて存在すると書き残している（三田一郎『科学者はなぜ神を信じるのか』）。